
SOUND OF HEART

花衣香音

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

SOUND OF HEART

【Zコード】

N1164Z

【作者名】

花衣香音

【あらすじ】

秋は新米の英語教師として高校に赴任してきた。他の教師から誘われるが、秋には恋人がいるという。彼女の恋人とはいつたま誰なのか。秋の気持ちはどうなるのか。新米英語教師、秋のお話です。

秋はこの春から高校の正教員として採用された。
担当科目は英語。

中学、高校とイギリスの学校へ行っていたので、英語は日本語と同じくらい使いこなせる。

そのためなのか、新卒にもかかわらず、採用されることができたのかもしねない。

今は卒業してすぐ正教員に採用されるには採用試験でかなり頑張らないといけないと聞いていた。

秋は採用されてとても嬉しかった。

教師になるのはずっと夢だったのだ。

中学時代、勉強の楽しさを教えてもらつてから、自分もぜひ教師になりたいと思っていた。

赴任する学校には前に挨拶に行つてはいるし、準備で何度も出勤もした。

それでも、新学期、教師として学校へ行くのは緊張する。

少し早めに学校に到着して他の先生方に挨拶をする。

自分用に与えられた机が、すでにこれから教師としての第1日目が待つていてることを告げてはいるようだった。

今日は生徒たちの前でも、新しく赴任した先生として紹介される。

あまり人前で上がらない秋だが、緊張はしていた。

これからはじまる教師としての生活に期待と不安が混じっている。

朝、職員の朝礼があり、始業式の準備、注意点など指示があつた後
体育館へ向かつた。

今年、秋の赴任した学校には新卒の秋と、新採の数学の教師がいた。
この辺りの学校では今年から、数学と英語に力を入れるらしくそれで採用枠があつたらしい。

残りの先生方は何年目かのベテランだ。

その他に移動になつた先生方もいたようで、転勤で学校を離れた先生の分、新しい先生方が代わりにやつてきたが、みんな別の学校から転勤になつてきた先生方なので、教師として新米なのは英語担当の秋と数学の田上という新採の教師だけだ。

移動になつた教師と、新しく採用になつた教師の紹介が始まった。

「…では次に、英語担当の坂井秋先生です。1年生の英語を担当し、同じく1年生の副担任になります。」

秋が生徒たちに向かつて軽く頭を下げる。

「続いて、田上直輝先生、2年生の数学を担当してもらいます。同じく2年生の副担任になります。」

田上も秋と同じように、生徒たちに向かつて、頭を下げる。

紹介が終わると壇上から降りてそのまま始業式に参列していると、

生徒たちから自分たちのことが言われているのが聞こえてきた。

「…ねえ、ねえ…新しい田上先生、かつこいいね。」

「うん、私もそう思った…」

「いいなあ、2年生、田上先生に勉強教えてもらえて…。」

「2年じゃなくても、質問しに行つてもいいのかな…」

別の生徒たちからは秋のことを話している声が聞こえてきた。

「…なあ、あの坂井って結構いけてんジヤン。」

「…俺も、結構好みかな。」

「まだ若いんだろ。」

「なんか新卒つて話だぞ。」

「…つてことは22つてことか。」

「先生、わかりませえーん、とか言つて、顔覚えてもらひつかな。」

「でもさあ、転勤で來た湊先生の方がカッコイイよね。」

「うん、私も田上先生より、湊先生の方が絶対いい…」

「すごい、大人つて感じだしさ…」

「うん…眼鏡かけててクールつて感じだよね。」

始業式の間中、生徒たちは新しく來た先生たちの話で持ちきりだった。

職員室に戻ると、クラスを受け持つている教師たちはそれぞれ自分のクラスへ向かった。

副担任である秋は自分のクラスがないため、そのまま職員室で明日からの授業の準備などをしていた。

「坂井先生、どうですか、生徒たちが学校にいるときといないうちはだいぶ違うでしょう。」

校長が秋に話しかけてきた。

「はい、校長先生。」

今日は新年度の初日なので学活が中心で、実際の授業は明日からです。頑張ってくださいね。」

「はい。」

「坂井先生は生徒たちと一番年齢が近いので、話も合ひんじやないですか？」

「…そうだといいんですけど…」

すぐ近くにいた田上にも校長は声をかけた。

「ああ、田上先生。先生も明日からが授業ですね。」

「はい。僕は明日、1時間目からです。」

「先生も、坂井先生と同じようにまだまだお若い。生徒たちはやはり若い先生に自分の兄や姉のようなつもりで、距離が近いと思う場合が多いです。ぜひ、若い先生方なりに生徒たちの力になつて欲しいですね。」

「はい、僕もそう出来たらいいと思つています。」

「それは頼もしい。期待していますよ。」

「ありがとうございます。」

そう話すと、校長は自分の仕事に戻つていった。

「坂井先生…、新卒だとお聞きしてたんですけどやはつお若いんですね。」

「…そうですか…？」

「そうですよ。まだ20代初めの頃と、そりでないのでは、違いますよね。」

「…でも、田上先生だって、お若いんじゃないですか？」

「僕ですか？もう26ですよ。普通に勤めてたんですけどやつぱり教師になりたくてね。」

3年ぶりにもう一度教員採用試験を受験したんですよ。」

「…そうだったんですね。」

「坂井先生は一度で合格したんですね。すごいですね。」

「…そんなことないですよ。」

「イギリスに行つてた、と聞いてますが…長かつたんですか？」

「…6年くらいです。」

「その間は地元の学校へ？」

「そうですね。」

「それじゃあ英語の方が得意なんじゃないですか？」

「…どうでしょう…自分ではあまりきちんと意識したことないんですけど…」

「それでも不自由なく話せるんですね。つらやましいな。ぜひ僕にも英語を教えて欲しいですね。」

田上はどうやら秋の様子を伺っているようだ。

社交辞令というよりは、秋がどういう人間か試しているのだろうか。学校と言う特殊な環境は人間関係がいろいろと大変だと聞いていた。そういう意味でもいろいろと探しを入れているのかもしれない、と秋は思った。

それに、田上は秋に興味を持つているような雰囲気も伺えた。自分の気のせいならいいのだが、ここは適当にかわしておいた方がいいだろう、と秋は思った。

「大人の方に教えるのは難しいですから、専門の学校へ行かれるといいですよ。」

「…ですか。でも、なかなかそういうところへ行く時間がないんですよね。」

「…それは、こういう仕事ですから、慣れるまでは仕方がないですね。」

「確かに…。僕も家に戻つてから授業のことが頭から離れないんですよ。初めての授業は…つてね。」

「それは…私も同じです。明日からですよね。」→BR←

「そうですね、まあ、お互に頑張りましょう。」

そんな話をしていると、3年生の副担任である山本が職員室に入ってきた。

「ああ、若い先生方ですね。生徒たちと同じ教師の1年生ですね。」

「はい、よろしくお願ひします。」

「さつきプリントを渡しに教室をひょっと見てきたんですけど、生徒たちはもう先生方の話をしていましたよ。」

「えつ……なんですか……」

「そうですよ。田上先生の名前は女子生徒たちにほしつかりと刻まれたみたいですね。」

「……それは……光栄ですね……。」

「それから、坂井先生もですよ。」

「私もですか……」

「男子生徒たちが先生に質問しに行くつてはりきつてましたから……」

「……質問……ですか……」

いつたいどんな質問をされるのだひつ……秋は、そんなことを考えた。

「まあ、これから徐々に慣れていくと思いますから、頑張つてくださいね。」

「……はい……」

「それから今週の金曜の夜は、明けて置いてください。今年赴任された先生方の歓迎会を開くので。

場所はまた金曜日になつたらお知らせすると思いますが、こここの先生方はほぼ全員毎年出席されるので、よろしくお願ひします。」

「はい、あけておきます。」

それだけ話すと、山本は自分の席の方へ戻つていった。

初日の午前中はほとんど準備で終わつた。
学校 자체もこの日は午前中しかないので、教師たちも職員室に戻つて昼食を取り始めた。

秋はお弁当を持つてきたのだが、どうしたものかと考えていると1年を担当している女性の教師、有吉が一緒に食べませんか、と声を掛けてくれた。

「坂井先生、今日は初日で緊張したんじゃない？」

「はい。やつぱり生徒たちが田の前にいると違いますね。」

「でも、明日から授業があるんでしょ。」

「はい、明日は1時間田から午前中はずつとあります。」

「そう、頑張ってね。」

有吉と食事を取つていると、他の女性教師たちも秋達に混ざつてきた。

女性より男性教師のほうが人数が多いので、こいつらが午前中だけの授業などのときは比較的みんな集まつて、食事を取ることが多いようだ。

お弁当を食べ終え、秋は他の教師たちと話していた。

「坂井先生…新卒でしょ。若いわよね～。」

「生徒たちとあんまり変わらないんでしょ。」

「先生…22歳？」

「ハイ…」

「いいなあ～」

「私もその頃に戻りたい…」

「いいわよねえ…可愛いし、お肌ぴちぴちだし…」

「H…あの…」

秋は苦笑しながら、話を聞いていた。

こうこう現場だと、どうしても新しく赴任してきた教師が話題のターゲットにされてしまうのだらう。

「あんまり坂井先生をいじめるのはかわいそうよ。」

「だつて、ねえ。やつぱり若い人にはいろいろ聞きたいし…」

「先生方、これ、結構つらいんですよ…」

「あら、愛美先生。」

「だつて、去年まで私がいつも先生方のターゲットだつたから…坂

井先生の今の気持ち、すこしくわかります。」

「そう、そう。愛美ちゃんも若かつたわよね。えつと、26だつた

？」

「そうよ。確か家の息子と同じ。」

「馬場先生…」

職場の先生方からいろいろな質問を浴びせられたが、それは同じ職場で働く彼女たちなりの心遣いなのだ、と秋は思った。

こうしてざつくばらんにいろいろと話しているうちに、午前中にあつた硬い緊張が取れ、秋自身すくなくラックスして話が出来るようになつた。

秋にはじめに声を掛けてくれた有吉先生は29歳、愛美ちゃんと呼

ばれていた大谷先生は26歳、この2人が秋と同じ20歳代で、他の先生方はもっとずっと上なのか、秘密、といつて教えてもらえたかった。

でも彼女たちはいつも生徒たちと接しているせいが、一緒に話していると楽しいし話題が若い。

まだ他の男性教師たちと話をしたわけで無いが、こうしてほっとできる先生方がいる職場で良かつた、と思つた。

明日からいよいよ授業が始まる、気合入れないとね…

みんなお弁当を片付け始め、それぞれ明日の準備を始めた。秋もお弁当箱を片付け、明日の授業の準備をするために自分の机に戻つた。

翌日から授業が始まると週末まではあつとこつ間だった。

毎日授業の準備と、生徒たちの様子を見ながらまた次の準備をする。まだ慣れていない1週目はいろいろな意味で大変だった。時間があつという間にたつてしまい、授業が終わつた後いつも学校に遅くまで残つていて、気づくともうこんな時間、という状態だった。

でもそれは1週目の授業ではあっても秋には樂しいことだった。ずっとやりたいと思つていた仕事だ。まだ新米だが、毎日が充実していた。

「坂井先生、そろそろ行かないと他の先生方に怒られますよ……」「田上先生……え……もうこんな時間だったんですね。」「やつぱり……気づいてなかつたんですね……他の先生方はほとんびり出発されたようですね。」

今職員室に残つてるのは、秋と田上、それに後2・3人の先生方だけだった。

「早く行かないと、怒られちゃいますね。」「僕もちゅうぶん出るといひですかり!」一緒にしましょ。」

目的地が一緒なのに別々に行くのもどうかと思い、秋は田上と一緒に歓迎会の行われる店に向かった。

「坂井先生、どうですか授業は？」

「そうですね… よりやく少し慣れてきたって感じです。田上先生は？」

「僕ですか?… まあ、それなりにですね。」

まだお互いに新任教師だ。

2人ともまだ新米、ということに変わりはない。

教科が違つてはいても、指導に関しては経験がないといふことで、同じようなところで共感するところも多いようだ。

「坂井先生、男子生徒から人気ありますよ。」

「あ… それはきっと年が一番近いからですよ。田上先生の方こそ、私、女生徒からたくさん先生の事聞かれて、返答に困っちゃいました。」

「…どうして返事に困ったんですか?」

「え… どうしてって… 先生の誕生日や趣味なんかを教えてって言われても… 何にも知りませんからね。」

秋はクスクスと笑いながら答えている。

田上は秋の笑顔を見ながらいろいろなことを話しかけてきた。新しく受け持つた授業のことや生徒たちとのことなどを話していたら、あつという間に目的地の店に着いた。

すでに他の先生方のほとんどは到着して、後は2・3人ほどの先生が来るのを待っている。

秋たちが店についたすぐ後に、残りの先生たちも到着し歓迎会が始まった。

1次会は和やかな雰囲気ですすめられ、顔を知っている程度だった先生方とも話をすることが出来、結局秋はみんなから坂井先生ではなく秋先生と呼ばれることになってしまった。

その1次会も終わり、2次会へと流れていった。

何人かの先生方は帰宅をしたが、ほとんどの先生は次の2次会へも参加するようだ。

2次会はカラオケだ。

秋は湊の横に座ることになった。

「秋先生、だいぶ生徒たちから評判がいいみたいだね。」

「え…あの、湊先生、どんな評判ですか?」

「秋先生の授業はすぐ良くわかるって、1年生の生徒が言つていたよ。」

「あ、ありがとうございます。生徒たちにそう言つてもうられるのが一番ほっとします。」

「まあ、俺も最初はそうだったからね。秋先生の気持ち、すぐくわかるよ。」

「ええ…湊先生も…始めは緊張なさつてたんですか?」

「…そりやそうだろ。」

「でも…なんだか…」

「なんだか…?」

「いえ…湊先生なら、始めからびしそと授業をしてそうなので…」

「どうして?」

「なんか、そんなイメージが…」

「俺つてどんなイメージ?」

「どんなつて…そうですね…手抜きがないというか…完璧というか…隙がないというか…」

「す「じ」い言われよつだな。」

そういうながら、湊は笑っている。

湊の噂は他の女の先生から聞いた。
授業の質がとても高く、私立の学校からも引抜がひつきりなしに来るらしいのだが、公立の方がいろいろな生徒たちに会えるから、と言つて断り続いているらしい。

生徒たちからもたつた1週間の間に、信頼できる先生としてすでに一目置かれているらしいのだ。

それに、眼鏡をかけていても顔がいいところとは隠しがちがないし、表情が妙に色っぽい。

きびきびとした口調で、しつかりと仕事をこなし、すらっと背が高くサッカーチームの顧問もする事になった湊は、女子生徒はもちろん、他の女性教師の間でも噂になっている。

秋自身、何度も他の女性教師から湊の話をされている。

「湊先生、秋先生、2人で話してないで何か歌いなさいよー先生たちの歓迎会なんだから。」

馬場先生が2人に曲のリストが載っている厚い本を手渡す。

「嫌…俺はあんまり歌は…」

「何言つてるのー若いんだから恥ずかしがつたつてしようがないでしょ。教頭先生もさつきから歌つてらっしゃるんだから。ほら、何か選びなさい。」

湊は苦笑いをしながら本を受け取る。

「秋先生、あなたもよ。」

「私も…ですか？」

「当たり前でしょ。」

「…私…あんまり歌、知らないんですよね…」

「何でもいいじゃなく、好きなの歌えばいいのよ。どうせみんな人の歌なんか聞いてないんだから。」

確かにそうだ。

みんな、始まつたときと終わつたときは拍手をして盛り上げているが、その間は近くの先生方とおしゃべりをしている。

「ええ…それじゃ、もし歌える曲があつたらでいいですか?」

「それでいいわよ。何?何の曲?」

「あの…英語になつちゃうんですけど…それにあるかどうか…」

「無くても何か歌うのよ、わかつた?」

「…とりあえず…探してみます。」

秋は渡された本を持って、一つため息をついた。

湊はさうと曲を入れさせられ、歌い始めた。

話し声もなかなかいいと思うが、歌もかなり上手い。

ちらりと周りを見回すと、女性教師がみんな湊の方を見ている。

特に愛美先生はもう田が釘付け状態だ。

なるほど、愛美先生は湊先生のことが…

秋はそんなことを考えながら周りの人間を観察していた。

ゆっくりとあたりを見渡している途中で、自分のほうへ視線が向けられていたのに気づいた。

誰か見てる…？

そちらへ田を向けると、田上がじっとこちらを見ていた。

田上先生？

秋と目が合つと、田上はにこりと微笑み、秋の方へ手を振つてきた。秋もとりあえず、軽く微笑み返したところで湊の歌が終わり、拍手が起つた。

「秋先生、どうだった？」

「は？」

「俺の歌。」

「ああ、とてもお上手ですね。」

「そう?」

「ええ。なんか、皆さん、湊先生の方に視線が集つていましたよ。」

「秋先生は？」

「私？」

「せつかく隣に座ったのに、俺の歌つてる姿、見てくれなかつたのか。」

「え……あの……あつ……隣ですから……じつと見てたら変ですよ。」

「……そうだな……」

湊は、秋の方をじつと見ている。

秋は、ちょっとお手洗いへ……と書つて席を立つた。

湊と田上…

学校が始まつてから1週間、2人はさりげなくだが秋との距離を縮めようとしているのは気づいていた。

だが秋に全くその気が無いのだから、これからどうにかしてかわしていかないといけない。

大学のときもそうだったが、友達との集りだと言われ、そのつもりで行つたら合コンで、秋のことを気に入つた男から逃れるのが大変だつたという経験も一度や2度ではない。

こつちにその気が無いのが、どうして分からぬのかな…
秋は、一つため息をついた。

そのとき、愛美が化粧室に入ってきた。

「愛美先生」

「秋先生、さつさき湊先生と何を話してたんですか？なんか楽しそうでいいなあつて思つて。」

愛美がさりげない感じを装つて秋にきて来た。

「何も話してたわけじゃないんですよ。眞さん、湊先生の方を見てましたよって言ってただけなんです。」

「やうなんだ。」

愛美が少しほつとしたような顔をしている。

でもまた何かふと思いついたように表情を曇らせて、秋に話かけた。

「でも…湊先生、秋先生のことずっと見てますよね。さつきも見てたし…」

「え…」

「いいなあ…」

「愛美先生…」

「私も湊先生ともっと話したい…」

少しお酒が入つて酔いがまわっているのかもしれない。

愛美が少し甘えたような、拗ねたような口調で話している。他の先生から、愛美ちゃん、とちゃん付けで呼ばれるのは、少しひやひやする。少しそうした雰囲気があるからなのかもしれない。

「あ、愛美先生、私、馬場先生たちに少し教えていただきたいことがあるので、席を替わつていただいてもいいですか？」

「え…いいの…？でも…湊先生、秋先生のこと気に入つてているみたいだし…」

「あ…それは…分かりませんけど、でも私は愛美先生が思つてているような感情は湊先生には無いので…」

「え…やだ…秋先生にも分かっちゃうの？」

「…ええ…」

「もう…やだな…恥ずかしい…」

「あの、それに…、私には別に決まった人がいますから…」

「…え…それって…」

「もちろん職場の人ではないです。同級生ですから…」

「え… そうなの？ 秋先生って彼氏いたの？」

「彼氏というか… なんというか… でもまあ… 相手はいますから…」

「そつか… そつなんだ… ジやあ、秋先生はもう売約済みってことなんだ」

「愛美先生… 確かにそなりますけど…」

「ほんとー、良かった。」

心底ほつとしている様子を見ると、もつ苦笑いするしかない。子供っぽいというか、素直と言ひつか…

とりあえず、これで湊の視線はかわせそうだ。

化粧室を出て、カラオケの部屋へ戻る。馬場先生たち女性の間に秋は腰を下ろした。

「あら、秋先生、湊先生の横に戻らなくてもいいの？」

「あ、いいんです。愛美先生に代わつてもらいました。」

「ええ、いいのぉー？ 湊先生、なんかこっちにらんでるけど…」

「いえ… 私はこっちの方がいいです。」

「どうしてー？ 湊先生結構いい感じじゃない？ 秋先生のこと気にしてるみたいだし。」

「いえ、でも私は、本当にいいんです…。」

「でも、田上先生も秋先生のこと狙つてるっぽいよね…」

「さつきも湊先生の横で座つて話してると、じつと見てたわよね。」

「うん、うん。私も気づいた。」

「秋先生、田上先生の方がいいの？」

「そつかー、秋先生、田上先生だつたんだ。」

「え、違いますよ。」

「田上先生の方が、年が若いものね。」

「湊先生つていいくつだっけ?」

「確か、今年30じゃなかつたっけ?」

「そうそうよー!」のあいだ、ぼくも今年は三十路ですって言つてたもの。」

「でも田上先生か…。秋先生から見たら湊先生は大人の男つて感じだけど、田上先生はもうちょっと若い感じなんかしら?」

「いえ、本当に、私どちらの先生のこともそんな風に思つていませんから。」

「あら、どうして? もつたひない。この職場、なかなか出会いって無いのよ! いい人見つけたら、さっさとキープしておかないと。」

「いえ、本当にいいんです。」

「…秋先生、恋人いるんだ…」

「…えつ、そうなの?」

「そつか、秋先生、彼氏いるんだ。年は? どこで知り合つたの?」

「え…」

「カツコイイの、秋先生の彼氏?」

「あの…」

「背は? どんな雰囲気?」

「先生方…」

秋が困つていていたとき、ちょうど秋の入れた曲がかかり始めた。

「あつ、それ、私です。」

とつあえず、質問に答えることは後にして、秋は歌い始めた。

秋はイントロが流れ出ると、その音楽とともに「うつと英語の歌を歌い上げた。

「うつ」としたバラードの曲で、秋のとても好きな曲だ。

周りの先生方は、秋の歌声に話を一瞬止めると、みんなで聞き入っていた。

「うわあ～、秋先生、すごい上手！」

「その曲って、何、何？」

「ああ、UJの曲は”Sound of Heart”って言つてます。」

「サウンド…？」

「はい。」

「それって、イギリスのグループ、U-STREAMの曲でしょ。」

「田上先生知つてるんですか？」

「そりやそうですよ、馬場先生。今、本国イギリスはむちゅうんですけど、アメリカでもすごい人気で、全米、全英のチャートで出す曲がみんなヒットチャート1位を取つてるんですから。」

「私は全然知らなかつた…」

「そうだつたんだな。俺の息子も聞いてるんだよな…」

「吉沢先生の息子さんもですか？」

「ああ。」

「でも、UJの曲はまだ、U-STREAMがテレビーした頃の曲ですよね、秋先生。」

「ええ…田上先生、良ぐ」存知ですね。」

「そりや、もう！全米でデビューした頃からのファンですかね。初めて彼らの歌を聞いたときにはもう衝撃でしたね。もうそれから全米デビュー前のイギリスでのアルバムとか聞きまくりましたよ！」

秋先生も、U - STREAMのファンですね、この曲をこんなに歌うくらいだから。」

「ファン… そうですね…」

「ボーカルのジェイはすごいですよ！ねえ、秋先生。」

「… そう… ですね…」

「ふうーん… でもいい曲ですね。私も今度聞いてみようかな…」

「いいですよ、有吉先生。このグループはお勧めですね。」

「そうなの？ それじゃ今度CD探してみようかな…」

「それなら僕のCDをお貸しますよ。絶対お勧めですから。」

2次会を終え、秋は家に戻った。

久しぶりに遅くまで外で過ごしてていたので少し疲れてしまった。

今日はジェイの歌を歌つた
やつぱり彼の歌はすごい…

U - STREAMというグループは4年前にデビューしたグループだ。

曲はほとんどをボーカルのジェイが作詞、作曲をしている。

デビューするとイギリスでじわりじわりと人気が出てきて、一昨々年、アメリカでデビューするとたちまち人気に火がつき、全世界でのアルバム売り上げ数はかなりな数だ。

「ジョイ…本当にす」「よね…」

秋は今日歌つた歌を思い出しながら、彼らの曲を思い浮かべる。ベットに入りながら、自然と口から彼の歌が流れ出てくる。

秋の母はイギリスにいる。

中学に上がる前に秋の父は事故で亡くなってしまい、母は秋を連れてイギリスで暮らすようになったのだ。

もちろん、秋の父も母も日本人だ。

だが、仕事の関係で結婚前はヨーロッパにたびたび訪れていた秋の母は、イギリスで仕事をしていくことに決め、秋も中学、高校とイギリスで過ごした。

秋は教師になりたくて大学は日本に戻り、教職を取つて今高校で英語の教師をしている。

だが母はイギリスにいるので、年に一度はイギリスに戻っているのだ。

また来週から生徒たちの授業が始まる。

自分も教師として、早く一人前になれるよつと頑張らないと…

秋はU・STREAMの曲をBGMにしながら、ゆっくりと眠りについた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1164z/>

SOUND OF HEART

2011年12月5日09時03分発行